

矢作川中下流域の農業水利整備を背景とした、住民参加の環境整備と環境教育への取り組み

大塚 義人



せせらぎ水路を清掃する住民（「明治用水」から）

1級河川「矢作川」は長野県を源に岐阜県南東部、愛知県西三河地域を流れ三河湾へ注ぐ。矢作川中下流域での農業水利開発の歴史は古く、戦後は国営事業が相次ぎ、近年は平成6（1994）～23（2011）年度まで国営「新矢作川用水農業水利事業」が実施された。

過去、同中下流域では土地改良区による水源地域の森林育成や土地改良区と民間が協力し水質保全（矢作川方式など）に取り組んできたが、国営事業にともない農業用水を中心に地域環境が整備されたことから環境整備への住民参加、環境教育も活発となった。

平成16（2004）年度第34回上野賞は「住民参加による農業水利の環境整備および環境教育への取り組み——矢作川中下流域地区における農業水利施設の整備——」に対して東海農政局新矢作川用水農業水利事業所、愛知県農林水産部、明治用水土地改良区、矢作川沿岸土地改良区連合へ贈られた。（本文中、氏名等敬称略）

※「上野賞」は日本の農業土木学の創始者ともいべき上野英三郎博士の業績を称え昭和46（1971）年に農業土木学会（現・農業農村工学会）によって創設された。農業土木に関する新しい分野の発展に寄与した団体、自治体などを表彰する。

1国を越える愛知県のGDP

愛知県は本州のほぼ中央、東は静岡県、北は長野県と岐阜県、西は三重県に接し、南は三河湾、伊勢湾を通じて太平洋に面している。人口は約743万人、そのうち県庁所在地の名古屋市が約227万人を占める。

地域的には、歴史的な経緯から名古屋市を含

む県西
部を「尾
張」、東
部を「三
河」とい
い、さ
らに三
河は尾
張に接
する「西
三河」と
遠江（静
岡県西部）や信濃（長野県南部）に接する「東三河」
にわけることができ、面積比は1…1…1。今
回は「西三河」を舞台とするが、まず愛知県の概
要からみていこう。

愛知県は自動車およびその関連産業、航空機
産業などを中心とした輸送機械、鉄鋼、機械、
食料品、プラスチック製造、窯業などが発展し、
平成22（2010）年の製造品出荷額等は約38兆
2,108億円。昭和52（1977）年以来34年
連続全国1位にある。また、GDPにおいても
平成18（2006）年には、世界順位18位のオラ
ンダ、17位のオーストラリア、16位のトルコを
抜いて15位のインドネシアと肩を並べ、1国レ
ベルの経済規模を誇っている。

堅調な経済にともない人口約227万人の名
古屋市をはじめ、西三河の岡崎市（人口約37万人）、
豊田市（約42万人）、東三河の豊橋市（約38万人）、
豊川市（約18万人）などの中心市街地においては



愛知県の位置と3地域

商業活動も盛況である。

主な地形と気候

愛知県の総面積は約5,165 km²、47都道府
県中27位。主な地形は――

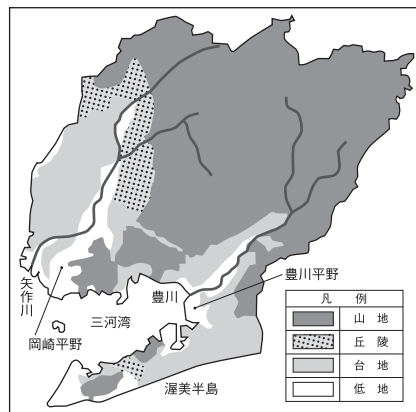
尾張は北に尾張丘陵、中部、南部は1級河川
の本曾川、庄内川が築いた尾張平野（岐阜・愛知
にまたがる濃尾平野の愛知県部分）が位置する。

西三河は北に尾張丘陵と三河山地が位置し、
矢作川が南流、中下流域は岡崎平野（西三河平野
ともいう）が占める。岡崎平野の西半分は洪積層
からなる丘陵地と台地、残った東半分が沖積低
地であり、河岸段丘、海岸段丘なども存在する。

東三河は大半が三河山地、南部の豊川下流に
豊川平野（豊橋平野あるいは東三河平野ともいう）が
あるが、同平野にも平地が多いとはいえない。

岡崎、豊川平野とも丘陵地と台地により低地は
限定的である。

気候は、全県的に太平洋側気候にあつて、夏
季は高温・多雨、冬季は少雨・乾燥するという
特徴をもつ。また三
河地域の
北部、三河
山地は内
陸性傾向
にあり、冬
季は厳し
い冷え込
み、南部の



三河の地形（「県土レポートあいち99」から）

渥美半島、知多半島は黒潮の影響により四季を
通じて温和な気候にある。

農業生産においても全国有数

愛知県の平成22（2010）年の農業産出額は
2,962億円で全国第6位、それ以前も5、6、
7位を行き来する有数の農業県である。同21（2
009）年の耕地10aあたりの生産農業所得は
11万7,315円で全国2位。

主な品目の農業産出額の全国順位は、花き1
位（昭和38年以来連続）、野菜4位、乳用牛7位、
鶏卵7位、麦類8位と続き、品目ではキャベツ、
カリフラワー、しそ、いちじく、ふき、菊、バラ、
洋ラン、シクラメン、観葉植物などが産出額1
位である。農業産出額2,962億円の部門別
構成比は、野菜37・6%、花き18%、米8・4
%、豚7・5%、鶏7・4%、乳用牛7・3%、
果実6%、肉用牛3・1%、その他からなる。

耕地率は15・3%、耕地面積は約7万9,1
00ha、うち田は4万4,600ha、水田率は
約56・4%、畑は3万4,500ha。

総農家数は8万4,028戸、うち販売農家
は約52%の4万3,599戸、自給的農家は約
48%の4万4,29戸、販売農家の農業就業人口
は7万7,359人である。

これらのデータは県内、東海圏の消費地を
対象とした都市近郊型農業の発展を意味し、市
場ニーズに合ったバランスの良い農作物生産、
高付加価値、集約性の高い農業が実現されてい
ることをあらわす。

「西三河」と「矢作川」

西三河は9市1町からなり、世帯数は約61万世帯、人口は約158万人。

土地基盤整備がすすみ、稲作、畑作といった農産、園芸、畜産と広範な生産が特徴、愛知県を代表する農業地帯である。また稲作を基幹に利用権の設定や作業の受託が拡大、経営耕地面積10ha以上の農家は202戸、1千万円以上の販売金額の大規模農家は1,034戸を数える。

同地域のうち矢作川流域自治体は豊田市、岡崎市、安城市、西尾市、碧南市（以上西三河）と設楽町（東三河）の5市1町、流域人口は約122万人。矢作川の水は農業用、工業用、上水道、発電など多様に用いられ、西三河の生命線となっている。

流域自治体の耕地面積は1万8,951ha（県の耕地面積の約24%）、田1万3,908ha、畑5,042ha（耕地面積と田と畑の合計が合わないが愛知県統計のまま）。水田率は73%。地域の農家数は1万7,965戸、うち販売農家8,929戸、自給的農家9,036戸、販売農家の農業就業人口は1万4,



西三河の自治体



矢作川的主要な流路と支流

435人。とくに矢作川中下流域の安城・碧南市のいちじく、西尾市の抹茶は全国1の生産量を誇り、安城市はかつて「日本デンマーク」と称される農業先進地として教科書にも掲載された。こうした矢作川中下流域の農業発展はまさに矢作川による恩恵である。

縄文・森林文化と 弥生・稲作文化とのせめぎあい

西三河では2万2千〜2万年前の旧石器時代後期から発掘された石器などで人の活動がうかがわれ、森の豊かな矢作川流域の丘陵地や台地で旧石器時代の暮らしが営まれていた。

縄文時代へと移行するのは約1万5千年前から。豊田地域では約4千5百年前から竪穴式住居が建ち定住生活が営まれた。岡崎市の真宮遺跡からは、約3千〜2千3百年前の縄文時代

後期の住居跡12棟、土器棺墓、石斧や石皿など日常生活道具、祭祀具などを出土した。

稲作はおよそ紀元前4〜3世紀にわが国に入ったとされる。ただし紀元前10世紀までさかのぼるといふ説もある。弥生時代は稲作が入ってから3世紀中期までの時代区分で、近畿地方に稲作が伝播したのは弥生時代前期、尾張地域には弥生時代前期後半から中期にかけて。

尾張に稲作が広がっていた時期、三河ではまだ縄文時代晩期の土器が用いられ、稲作の開始は尾張に遅れ弥生時代中期以降と推定される。尾張の集落遺跡が低湿地に位置するのに対して、西三河は丘陵、台地上にあったことから森の恵みを受ける暮らしの継続と立地的な条件により水田稲作の開始が遅れたのだろう。弥生時代中期以降、徐々に矢作川中下流域の沖積平野に集落立地が移りはじめ、その規模も拡大、西の水田稲作文化に影響されたと考えられる。

ちなみに本州中部で西の弥生・稲作文化と東の縄文・森林文化とのせめぎ合いがあり、稲作伝播の東進スピードが鈍ったとの説がある。

「三河国」の成立

古代律令制下、当初は西三河のみが「三河国」、東三河は「穂国」とわけられ、701年の大宝律令以降に両国を合わせ「三河国」が誕生したとされるが、穂国自体の存在を否定、虚構とする意見もあり定かではない。「三河」、「三川」という名前の由来には、西三河の「矢作川」と「乙川（矢作川最大の支流）」、東三河の「豊川」の三川をさ

したことから、矢作川が古くは「御川」と称せられていたことから、などの諸説がある。

西三河の稲作と農地開発は、矢作川沿いの低湿地からはじまり、奈良・平安時代の荘園、平安時代の「郷（地方行政の単位）」も多くが低湿地周辺に存在した。一方、水利の便が悪い丘陵や台地上は明治という時代を待つしかなかった。

平安時代中期に編さんされた延喜式では、三河国は郷が8つ、大・上・中・小の国の格付けでは2番目の上国とされた。しかし三河国司の報告には「田は狭小で山野が広がっている」とあり、室町時代中期の書物にも三河国は「山河が多く水の便が悪く、五穀不熟国で貧しく、下の小国」と当時の様子が記されている。豊かではなかった三河のイメージが浮かんでくる。

室町時代に入ると、矢作川の乱流によって生まれた下流域の湖沼や海岸部の干拓による新田開発がはじまった。

矢作川中下流域の治水

話は一挙に安土桃山、江戸時代へと入る。三河を支配した徳川家康は豊臣秀吉によって関東へ移封（1590年）され、矢作川中流域の岡崎城主となったのが豊臣家臣の田中吉政。吉政は約10年の治世で岡崎城郭の拡張、城下町の整備とともに矢作川の改修を行う。

矢作川中下流域の低湿地では古代から農地開発が行われてきたが、風化した花崗岩を中心に土砂が流出し、増水、洪水に悩まされてきた。中流域では部分的に堤防が築かれたものの、吉

政はそれらをつなぎ合わせ一連堤を完成した。

1605〜1646年にかけては、家康の命により下流の西尾市域で矢作川本流の付け替えがはかられ、距離1,300m、幅36mの新川を開削、旧矢作川は締め切られ「矢作古川」となった。現在、矢作古川河口は新川（本流）河口から北東に10kmほど離れている。治水により17世紀（1601〜1700年）に三河全体で35万石が38万石へ3万石増加した。

また、1603年には県内2番目、西三河では初の占部用水が建設され、水害常襲地の村落移転、支流の付替え、築堤、堤防強化、集落を囲む輪中堤の建設などとともに、矢作川下流域では取水堰づくりが相次ぎ、湖沼、海岸部の干拓が活発化、新田開発に拍車がかかった。だが矢作川を完全に抑え込むことはできず、洪水による破堤が繰り返された。

三河の人々は家康を象徴として「粘り強く団結力がある」とされる。矢作川と支流の水害と復旧の繰り返しがそうした気質の一因にあるのかもしれない。

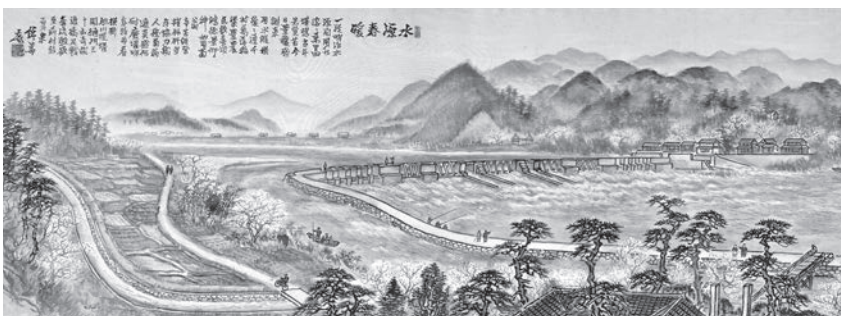
「明治」を象徴する画期的な用水づくり

岡崎平野の西半分、矢作川西岸（右岸）は低湿地を除きほとんどを北から丘陵、中・南部は「拳母台地」、「碧海台地」が占める。南部の碧海台地は別名「安城ヶ原」といい、土壌は酸性の強い粘土質で水利に乏しいため荒涼たる原野と小松原だった。稲作はかろうじて谷水、湧水、ため池を水源に営まれ、台地上の水田2,300

ha、うち水田約1,200haに対し、ため池は延べ面積488haといわれるほど多かった。

幕末、ここに矢作川の水を引き約4,200haの新田開発を構想したのが旧和泉村の豪農であり西三河随一の造り酒屋でもあった都築弥厚である。5年の歳月をかけ測量を終えたものの、小藩所領や水利慣行の錯綜など地元利害が複雑で、計画は弥厚の病没で頓挫した。岡本兵松・伊豫田与八郎らがそれを引き継ぎ、明治維新後の国策殖産興業に力を入れていた愛知県も積極的に後押しした。

水源を矢作川上中流域の現豊田市域に求め、民間のアイディアと費用負担により明治12（1879）年に着工、同14（1881）年には総延長52kmが完成、「明治用水」と命名された。さらに支流約40本を開削し、同18（1885）年には総延長280kmとなり、約8,800haの新田開発と4,500haの用水改良につながった。



矢作川の明治用水旧頭首工絵図（水土里ネット明治用水提供）

「明治」の元号を冠したのは、明治という新時代において全国に先駆けて建設された民間主導の画期的な農業用水だったことからである。

同用水は新田開発、稲作営農の安定化、のちに多角的農業経営の発展を促し「日本デンマーク安城」を生んだ。県下では戦後、愛知用水、豊川用水といった大規模用水が建設されるが、明治用水建設のノウハウと成功がその背景にあるとされる。

市街化、都市化の進展でピーク時よりは減少したが、現在、明治用水は西岸に位置する旧矢作用水の一部を加え、北から豊田、岡崎、知立、刈谷、安城、高浜、碧南、西尾の8市を潤し、「水土里ネット明治用水（明治用水土地改良区・神谷金衛理事長）」の受益地は約5,700 ha、組合員数は約1万3,300人を数える。

用水開削と水不足

明治用水の開削を契機に碧海台地の北、挙母台地でも矢作川上中流域から取水する用水開削への運動が高揚し、明治20（1887）年工事着手、同27（1894）年に主な用水路を完成、「枝下用水」と名付けられた。受益地は現在の豊田市と周辺地域である。

一方、矢作川下流域では明治時代中期までに本流（新川）と古川から水を引く取水堰が26ヶ所、昭和時代に2ヶ所が追加され、28用水となり、ほぼ現在の用水路網が完成していた。

上中流域から取水する大規模な明治、枝下用水の完成、下流域での取水堰と用水網の充実に

よって湿田の乾田化や新田開発はいっそう盛んになり、用水需要が増した結果、干ばつ期には水不足が発生。新たに上中流域で取水する農民と古くから下流域で取水する農民との間で対立が起き、戦後のダム建設まで続く。

明治末期からは矢作川上流域に発電所がいくつも設けられ、水需要は増える一方だった。

相次いで実施される国営事業

戦後は国営事業がはじまる。「明治用水農業水利事業」は昭和17（1942）～32（1957）年度まで実施された西三河初の国営事業で、老朽化した明治用水堰堤の全面改修を目的に県営事業、旧農地開発営団を経て旧農林省の直轄事業となった。

昭和27（1952）～37（1962）年度の「矢作川農業水利事業」では、常習干ばつへの対策として、当時実績の少なかった農業用水専用のコンクリートダム「羽布ダム」を建設した。愛知高原国定公園の玄関口にあたるダム湖「三河湖」は「ダム湖百選」にも選ばれ、レジャー・観光客に親しまれている。

昭和38（1963）～53（1978）年度まで実施された「矢作川第二農業水利事業」は、下流域既設28ヶ所の取水堰を新設細川頭首工に合口するとともに、支流にも新たな頭首工を建設、これらを結ぶ55・9 kmの幹線水路を築き、農業用水の安定的、合理的な配分を実現、28用水を統合した用水は「矢作川用水」と名付けられた。なお、一部上流区間は県の

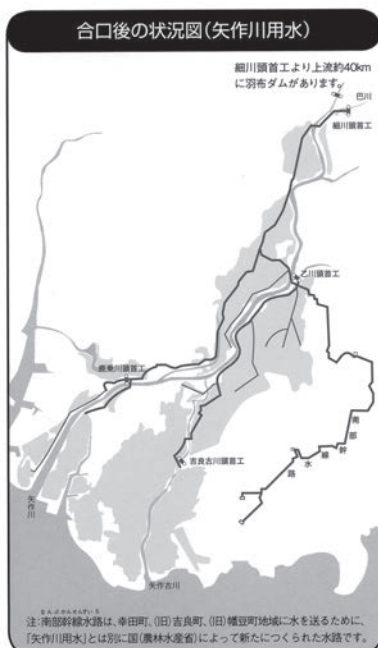
水道用水供給事業との共同事業であった。

「矢作川総合農業水利事業」は昭和45（1970）～63（1988）年度

にかけて西三河北部、明治用水、南部の3地域を対象に行われ、北部・南部地域では旧建設省の特定多目的ダム「矢作ダム」



昭和28年、地元学校指定水泳場だった明治用水（水土里ネット愛知HPから）

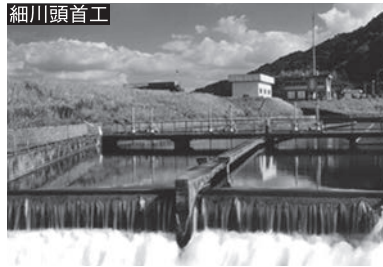
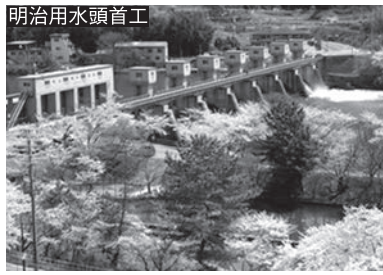


旧用水と現在の矢作川用水（「矢作川農業用水ものがたり」から）

新矢作川用水農業水利事業

「新矢作川用水農業水利事業」は平成6(19

年に新規水源を求めると同時に取水工、用水路を建設し、明治用水地域では用・排水路の改修、パイプライン化(頭首工から上流の約7kmを除く)を実施した。施行した用水路基幹部分は、県企業庁との共同事業として北部地域は上水道用水、明治用水地域は工業用水、南部地域は上水道に利用され、都市化で著しく高まりつつあった水需要への対応ともなった。



明治用水頭首工と細川頭首工
(水土里ネット愛知HPから)

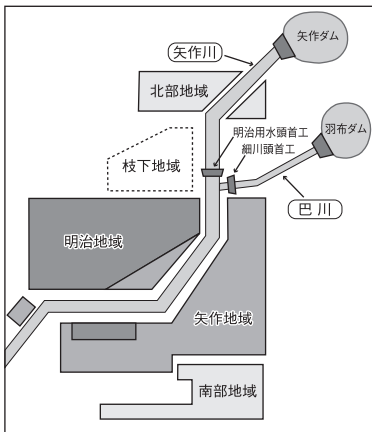


明治川神社付近の明治用水、改修前と改修後
(「西三河発展の礎」から)

94)〜23(2011)年度まで。羽布ダム、細川頭首工、用水路の改修、水管理システムの拡充・整備など、矢作川農業水利事業、矢作川第二農業水利事業と矢作川総合農業水利事業(南部地域)の既存水利施設のうち老朽化や構造的脆弱性によって機能が低下した施設を更新するとともに、都市化によるゴミの不法投棄への対応、水路の有効活用、現代的ほ場の整備など、時代の推移に対応する整備に取り組んだ。対象は北から豊田、岡崎、安城、碧南、西尾の5市と幸田町、約7千ha。

主な整備は――○良質な農業用水の安定的供給と維持管理費の軽減○幹線・支線水路のパイプライン化による水圧の有効利用で一部幹線の電気料を以前の半額に低減○基幹的な水路改修にあわせ、せせらぎ水路や管理用道路を設置、親水・通学道として有効活用を実現○県営関連事業などとの一体的な実施――であった。

同事業に関連して、かんがい排水事業3地区、ほ場整備事業19地区、畑地帯総合整備事業2地区、土地改良総合整備事業1地区、計25地区を
実施し、
県営関連
事業では
支線水路
のパイプ
ライン化
をはか
り、高度
で柔軟な



西三河の国営事業実施地(「西三河の礎」から)

水管理施設の整備、大規模化を支え、高い効率性を有したほ場整備を実施した。

新矢作川用水農業水利事業で整備した施設を管理する水土里ネットは、水土里ネット矢作連合(矢作川沿岸土地改良区連合・川上万一郎理事長)と水土里ネット矢作南部連合(矢作南部土地改良区連合・山口文雄理事長)。また、水土里ネット矢作連合(矢作川沿岸土地改良区連合)の構成員(単区改良区)として、水土里ネット明治用水(新矢作の北野エリア)と水土里ネット豊田(新矢作の上郷エリア)などが存在する。

”命の川”を守り育む取り組み

もともと矢作川は、頭首工地点で1,000㎓と集水域が狭く、決して豊かな水資源を誇っていたわけではない。そのため水、川、森、山を守る取り組みは全国に先駆けていた。

水土里ネット明治用水は明治22(1889)年には流域官有林の払い下げに反対し中止させ、同41(1908)年上流での造林事業を開始した。現在、長野県を中心に約525haの水源かん養林を所有、管理している。「水を使う者は自ら水をつくれ」という明治用水土地改良区の岡田菊次郎初代理事長の言葉はいまも生きている。近年は森林整備の大切さ、森林の役割などについて小学生を中心とした流域住民への啓発活動も行っている。

矢作川水系の水質浄化・保全にも積極的に取り組み、工場の立地、都市化の進展により水質汚濁が懸念されると、独自に水質分析室を設け

て監視、データ収集を強化した。

昭和44(1969)年には下流域6農業団体、7漁業団体、6自治体が結束し「矢作川沿岸水質保全対策協議会(矢水協)」を発足させ、矢作川を守る活動は水土里ネット明治用水から発展的に流域全体へと広がる。むろん同水土里ネットが主導的役割を担っていたことには変わりはない。同年(1971)の水質汚濁防止法施行を背景に、工場、事業所への調査、パトロールを強化、翌年には全国初の同法違反での告発を行った。こうした取り組みと同年(1973)年のオイルショックによる開発の減速、環境保護への関心の高まりなどがあいまって、水質浄化



パイプライン上部の自転車道(「明治用水」から)



明治用水本流(「明治用水」から)

は大きな成果をあげていった。

矢水協はこれを機に「流域は1つ運命共同体」を合言葉に上下流住民の交流推進、環境教育、啓発活動に乗り出し、上流域児童の潮干狩りへの招待、上流域への海産物の直送などを実施、上下流域自治体の姉妹提携を促した。

こうした民間主導型の流域管理法は全国から注目を浴び「矢作方式」といわれる。

パイプライン化と水土里ネット

矢作川総合、新矢作川用水農業水利事業では幹線・支線のパイプライン化が実施された。プラス面ではゴミ投棄の防止、農業用水の安定的供給、維持・管理の合理化、効率化、省エネ化、地表の有効活用などがあったが、マイナス面としては水路が地中に潜り、農業用水と住民との関わりの希薄化が心配された。そこで新たな関係づくりへの努力がはじまった。

明治用水地区では、パイプライン上部を植栽しつつ緑道・散歩道、自転車道として整備、せせらぎ水路(「ミニ明治用水」)を併設し、都市公園へも用水を引き入れ住民・市民の親水性を高めた。加えて複数の小学校に用水を引き込み、学校教育の一環としてせせらぎ水路、ミニ水田が活用されている。

新矢作川用水地区では、パイプライン工事に際して、地域住民の参加(ワークショップ方式)により水路上部の利用方法を検討し、整備後の草刈り、清掃などの維持・管理作業に住民が加わっている。また、せせらぎ水路の具体化、利用

方法について自治体、水

土里ネットと国営事業所との間で検討、調整がはかられた。

こうした活動は、農地や農業用水などの資源、環境を守る旧農地・水・



明治用水本流・水車公園(「明治用水」から)

環境保全対策、現在の農地・水保全管理支払交付金にも好影響を与え、取り組み面積は農振農用地区域内農用地面積に対して67%に達し、愛知県全体より22%も高く、安城市内ではほぼ100%、地域コミュニティの発展に大きく寄与している。

平成23(2011)年水土里ネット明治用水は通水130年を記念し明治用水会館に隣接して「水のかんきょう学習館」を建設した。建物には上流域の間伐材を採用、児童・住民が楽しみながら水や環境について学べる、地域活動の拠点施設としての役割を担っている。

変わっていく地域と変わらぬ伝統

国営事業によって地域農業は大きな発展を遂げた。安定的な用水供給と大区画ほ場によりブロッコローテーションが確立され、水稲、大豆、

「そつうせんり疏通千里・りたくばんせい利澤萬世」はいまも変わらず

住民参加の環境整備と環境教育について水土里ネット明治用水の竹内清晴事務局長にうかがった。それは“矢作川流域、西三河の歴史的な風土”という。



「矢作川は集水域が狭く、昔からの、また明治以降のかんがい用、発電、戦後は工業用、飲用などの利水が加わり、水需要は増加の一途をたどってきました。当然、限りある水を効率的、効果的につかう工夫と努力、利水調整への協力、水源や水質を守る活動は欠かせません。

水土里ネット明治用水は、明治時代に独自で水源地域の森林育成に乗り出し、高度成長期の環境悪化時からは矢作川の水質浄化を率先し進めています。

近年の国営事業によりほとんどの幹線・支線がパイプライン化されてからは、農業用水と農業者、地域住民との絆をどう保っていくかという課題が生まれました。

そこで取り組んだのが、末端のバルブ操作などを忘れないための内部研修会の開催、外部に対してはパイプライン上部の利活用、せせらぎ水路など住民を中心とした親水施設の維持・管理の促進、子どもや住民への矢作川、明治用水といった水についての環境教育、啓発活動です。

上野賞を受けた住民参加の環境整備と環境教育は、何か新しい活動をはじめようとしたのではなく、あくまでその時代その時代になすべき水土里ネットの責任と役割を認識し、実行してきた結果に過ぎません。それが可能となったのは、“粘り強く団結する”、“水は生命線”という三河人の気質と風土が背景にあったからです。

明治用水記念碑には、時の内務卿松方正義によって『疏通千里・利澤萬世』—水路を通す(疏通する)こと千里、その恩恵(利澤)は萬世におよぶ—と記されています。明治用水通水から130年が経ちましたが、その思いはいまも変わらず、これからも受け継がれていくはずです。

農業、工業、商業、そして住民の暮らしと、バランスのとれた発展が西三河の特徴、強み。それは矢作川の水と農業用水あつてのこと。水への感謝と先人の功績と恩恵に報いる活動は新しい頁を加えて続きます。」

小麦など西三河の基幹的な農作物の安定的な生産につながった。10 a 当たりの単収、収量も他地域に比べ増加し、出荷量は西三河の自治体が県内順位の上位を占める品目も少なくない。営農コストの低減、省力化、認定農業者数の順調な増加、担い手への農地集積などがすすみ、地域農業の展望にも新たな光を与えた。

同様に戦後は地域自体も大きく変わっていった。トヨタをはじめとする自動車およびその関連産業は飛躍的に発展、流域人口は倍以上に増え、住宅地や商業地、市街地が拡大、矢作川を水源とする水需要も増加した。

矢作川中下流域における住民参加の環境整備

と環境教育への取り組みは、21世紀の農業水利と地域住民との関係づくりという意味で高い評価を得ている。

それは伝統の確かな継承をも意味する。安城市の明治川神社には、用水開削功労者の都築弥厚、伊豫田与八郎、岡本兵松、枝下用水建設に尽力した西沢真蔵が神として祀られ、明治用水通水記念日の4月18日には大祭が開かれる。明治用水地区だけでも開削碑や記念碑は約40ヶ所におよび、水と先人への感謝を忘れず、その業績をいまに語り継ぐ努力は宮々と続く。

しかも伝統は受け継がれるだけでなく、時代を映した新たな頁を加えながら地域、流域の

風土となっていく。100年後も矢作川の水は西三河の生命線であり、矢作川中下流域の農業水利は工業と共存する豊かな農業を支えているにちがいない。

【参考】○資料—明治用水通水120年記念誌・明治用水(明治用水土地改良区)、疏通千里・利澤萬世(明治用水土地改良区、ほか)、矢作川用水歴史(新矢作川用水農業水利事業所)、矢作川農業用水ものがたり(新矢作川用水農業水利事業所)、大地への刻印(社団法人土地改良建設協会20周年記念)、農業土木遺産を訪ねて(社団法人土地改良建設協会)、○参考ホームページ—農林水産省、東海農政局、国土交通省中部地方整備局、中部地方環境事務所、愛知県、豊田市、岡崎市、安城市、西尾市、水士土の礎「三河の恵み—矢作川の流れ」、水土里ネット明治用水、水土里ネット愛知、疏水名鑑、奥三河郷土館